

二つの『アレクシウス』

— 中世フランス・イタリアの聖者伝をめぐって —

長 神 悟

本稿では、中世に数多く作られた聖者伝の1つである聖アレクシウスをめぐる2つの韻文作品、フランス語の *La Vie de Saint Alexis* 及びイタリア語の *Ritmo su Sant' Alessio*⁽¹⁾ を採り上げ、そこに見られる表現技法上の幾つかの特徴に就て両作品の源泉となったと思われるラテン語散文による伝記を参照しながら考察を進めてみたい。

伝えられるところによるとアレクシウスは4世紀ローマのさる高貴な家柄に生まれ十分な教育を受けた後、両親の定めに従って婚礼の儀を挙げる。ところが神への希求の念は已み難く婚礼の当夜、彼は花嫁の許を去りシリアの地に赴いて17年の月日を苦行者として過ごす。やがて故国の地を再び踏んだアレクシウスは父親の屋敷の軒下を住処として己の素姓を誰にも明かすことなく更に17年の間、貧しい乞食としての生活を送る。その死後はじめて奇跡によって自身が顕われ、聖人であることが分かる。

この聖者の伝記は元来、東方(シリア、ビザンチン)に起源を持つ話であったが、やがて西欧世界に伝えられるや大変な人気を博した。⁽³⁾ その西欧世界で作られた最も古いアレクシウス伝の1つが本稿で考察に用いる、ボランディスト⁽⁴⁾によって刊行された作者名不詳の、

10世紀頃の写本によって伝わるラテン語の *Vita* である。この *Vita* の成立以後書かれたラテン語あるいは西欧各国語によるアレクシウス伝は直接間接にこの *Vita* ないしはそれに極めて近い形の伝記に遡らせることができる。⁽⁵⁾ 後に内容的・修辭的に発展させられる基本的なモチーフはすべてこの *Vita* の中に求めることができるからである。⁽⁶⁾ ここで検討の対象とする中世フランス、イタリアの聖アレクシウス伝にしても、作者がその詩作にあたって直接 *Vita* を拠り所にしたという確証はどこにも無い訳であるが、⁽⁷⁾ この *Vita* の内容を事実上「取り込んでいる」両作品に対して、*Vita* を広い意味でその源泉と見做すことには間違いが無いと思われる。

恐らく聖職者の手に成ったであろう11世紀フランスの *La Vie de Saint Alexis* は人々の教化に資すべく聖人の祝日やその他の折に教会で朗誦されたものと推測されるが(Storey 1968, p. 11)⁽⁸⁾、一方、イタリア語の *Ritmo su Sant' Alessio* の方は吟遊楽人 *giullare* によって人々に語り聞かされたものと考えられている(Contini 1960, p. 15)。とは言え *Ritmo* は未だ完全に「世俗化」されていた訳ではなく、モンテカッシーノをその中心とする中部イタリアの精神風土の反映は顕著である(*ibid.*)⁽⁹⁾。いずれにせよ、両者のテキストの性格の差は各々の言語のうちに投影されている筈である。

註(2)にも記したようにイタリア語の *Ritmo* で語られているのはアレクシウス伝の前半の部分のみである。そこで小論では古伝語のテキストの方も内容的に *Ritmo* にほぼ相当する最初の20節辺りまでに焦点を絞って考察を行うことにする。

さてラテン語 *Vita* は《*Fuit Romae vir magnus ……*》(ローマに大人あり)といきなり *Alexius* の父親 *Euphemianus* の描写から始まるが、フランス語の *Vie*、イタリア語の *Ritmo* とともに本題に入る前に序の部分が置かれている。イタリア語の *Ritmo* は次のように始まる。

Dolce, nova consonanza,
facta l' aio per mastranza ;
et ore odite certanza
de qual mo mostre semblanza
per memoria retenanza.

(vv. 1-5)

心地よき新しき歌
我作れり、技をもて。
いざ聞き給え^{まこと}眞の話
かの人の似姿描いてみせん
記憶の中に留めんがため。

ここで facta l' aio の主語として登場し、聞き手に odite と呼びかける語り手は作品の随所に姿を現わす。

Hore mo vo dico d' Efimiano (v. 13)
いざエフィミアノが身の上を語らん

Mai quando la geo ad arrare,
quello vo volio recetare (vv. 111-112)
而してかの人婚儀に赴きし折の
その情景語り聞かせん。

Ma mo, se quella remanea,
ore audite s[anctu] A[lessiu] que facea (vv. 184-185)
さて花嫁とり残されたる間
聖アレッシオの為したる事聞き給え

語り手の顕在化という同様の事情はフランス語の作品にも見られる。

Pur hoc vus di, d' un son filz voil parler (v. 15)
これを皆方に申すは、彼が一子について語らんがため。

Ço ne sai jo cum longes i converset (v. 84)
彼の地に留まることの幾許やを知らず

Or revendrai al pedra ed a la medra (v. 101)
さて御父母が身の上に戻らん

こうした1人称＝語り手の介入が場面の転換などを予告し、聞き手に話の展開を把握し易くする、といった以上の意味を持つものであることは後に触れる。

いずれにせよラテン語 Vita はアレクシウスの生い立ちやその生涯をめぐる出来事を淡々と、「山もなければ谷もない[…]単調そのものの語り口で」(Auerbach 1967, p. 131), 直接話法の部分を除けば専ら3人称を主語に立てて記述しているのであって、上に挙げたイ

タリア語・フランス語の語り手の言葉に相当する字句は見当たらない。

フランス語『聖アレクシス伝』に反映している世界観について Auerbach は「なにごと
もすべて、黒白、善悪にはっきりぬり分けられており、それ以上のせんさくや吟味は必要が
ない。〔…〕片や、神への献身、世俗からの離脱、極楽往生という^{ひり}聖の道があり、片や
『大いなる悲哀』に通じている世俗一般のありのままの生活がある。それ以上にはいかなる
場所も意識の対象にはならない」(Auerbach 1967, p. 124)と述べているが同様の事は
ラテン語の Vita, イタリア語の Ritmo についても当てはまる。

この聖と俗との対比は、アレクシウスが神のみに仕えるべく花嫁の許を離れる婚礼の夜の
場面で1つのクライマックスに達することになるが、そこに至る伏線として、嫁礼の準備が
進み式が執り行われている最中にもアレクシウスの心が既に神にのみ向けられていたことを
示す表現がフランス語・イタリア語両作品に見られる。

Quant vint al fare, dunc le funt gentement.
Danz Alexis l'espuset belament,
Mais q'ost tel plaint dunt ne volsist nient :
De tut an tut ad a Deu sun talent. (vv. 47-50)

婚礼の時来たりて盛大に執り行う。
アレクシス殿美々しく妻を迎えたり。
然れどこれ彼の望みし事には露あらず
彼が思いなべて神にあればなり。

Ma Cristu Deu a tuttesore
sì li stai custoditore,
ka non le vai per core amore
d'estu mundu traditore ;
et ad quillu gillu, novo flore,
pemsavali dare lu patre honore
d'estu mundu traditore
(vv. 96-102)

然るに主キリスト常々
彼を護らせ給いければ
はかなき浮世の喜び
その心に忍び入る事なし。
而してこの百合、瑞々しき花に
はかなき浮世の誉れ
与えんと父親思いたり。

Li sacerdoti forunu adprestati,
àdberoli coronati.
Due corone de auro mundo tennu em capu,

ammerdora li cori de sotta li non capu.

(vv. 125-128)

司祭たちは手筈整い
二人に冠授けたり。
黄金の冠ともに戴く兩人なれど
その下なる心、ともには其処にあらず。

ラテン語 Vita でアレクシウスの両親が息子の花嫁を選び、婚礼の式が挙げられる件は次のように記述されている。

Cum autem ad tempus adolescentiae accessisset et eum nuptialibus infulis aptum judicassent, elegerunt ei puellam ex genere imperiali et ornaverunt thalamum et impositae sunt eis singulae coronae in templo sancti Bonifacii martyris per manus honoratissimorum sacerdotum et sic cum gaudeo et laetitia laetum duxerunt diem.

(Rohlf's 1968, p. XXV 以下)

息子が成長し婚礼を挙げるのに相応しい年頃になったと思われたので、両親は皇帝の血をひく娘を選び結婚の褥を飾った。そして殉教者聖ボニファチウス寺院で畏き司祭方の手によって花婿花嫁に各々の冠が授けられた。そうして歓喜のうちにこの喜ばしき日を過したのだった。

これに先立つ部分でラテン語 Vita はアレクシウスが学問を立派に修め、とりわけ心霊修行に於て秀でていた事を物語ってはいるが (et maxime spiritualibus floreret studiis), 息子に妻をとらせようとする父親の気持あるいは美々しく挙げられた婚礼の儀式と対照させてアレクシウスの敬神ぶりが描かれている訳ではない。聖と俗の対比、即ちアレクシウスの心情と彼を取り巻く世俗との対比は、フランス語・イタリア語の作者によって意識的に表現化されたのであった。⁽¹⁰⁾

婚礼の情景についてのラテン語 Vita の記述は上に見た通りだが、イタリア語 Ritmo の作者はその内容を更に敷衍しながら描き出している。

Fae sì grande laude fare
cket homo no lo pòtera estimare,
et doe thalomi fecenu adprestarè,
ammerdura su levare.
Oveunqua eranu iullare,
tutti currunu per iocare :
cythari cum timpani et sambuci,
tutti gianu cantando ad alta voce.

(vv. 113-120)

いとも盛大なる儀式執り行えば
その様思い描くは誰にも能わじ。
二つの寝台ねたいをしつらえて
兩人をその上に導きぬ。

楽人はそこかしこして
 芸を披瀝せんと皆駆けめぐる。
 鳴らすは 堅琴に笛太鼓
 皆々声高らかに歌いさわげり

この後更に 150 行まで婚礼の場面は続くが、これは式の様子を僅か 2 行（前出の vv. 47-48）で片付けている古伝語の作品と著しい対照を示している。描写のための描写を切り捨て、人々の教化に資するという目的を純粹に保っているフランス語のテキストと、主題とはさほど関わりのない場面でも絵画的・具体的な描写を通じて人を楽しませるのを忘れない *giullaresco* な *Ritmo* との作品の性格の違いによるものであろうか。(11)

とは言え、イタリア語 *Ritmo* に比べて古伝語作品の描写が常に簡単になっているという訳ではない。事が作品の主題に直接関わる出来事、一種の道徳的典範を形象化するのに相応しいと思われる場面に及ぶなら、古伝語作品の作者も言辭を惜しまない。そのいい例が次に見る婚礼の夜の場景である。

日が落ち婚礼の宴も果ると父親はアレクシウスに向って花嫁の待つ部屋を訪れるよう諭す。それに続くラテン語 *Vita* の記述は次のようである。

Ut autem intravit, coepit nobilissimus juvenis et in Christo sapientissimus instruere sponsam suam et plura ei sacramenta disserere. Deinde tradidit ei anulum suum aureum et rendam, id est caput baltei, quo cingebatur, involuta in prandeo et purpureo sudario dixitque ei : „ Suscipe haec et conversa, usque dum Domino placuerit, et Dominus sit inter nos. ” Post haec accepit de substantia sua et discessit ad mare ……

(Rohlf s 1968, p. XXVII)

部屋に入るや高貴なる若者は己が花嫁にキリストの教えを諄々と説き明し、多くの聖なる事柄について話し始めた。そうして彼女に金の指環と身につけていた剣の帯を緋色の布にくるんで渡し、こう言った。「これらのものを受けとり、主の御心にかなう限りずっと大切に置きなさい。主が私達の間におられますように」。それから彼は自分の貯えを持って海の方へ去って行った。

この部分に相当するフランス語のテキストは次のようになっている。

11) ……

Vint en la cambra ou er[e]t sa mulier.

(v. 55)

12) *Cum veit le lit, esguardat la pulcela ;
 Dunc li remembret de sun seinor celeste,
 Que plus ad cher que tut avoir terrestre.
 "E! Deus!" dist il, "cum fort pecét m'apresset !
 S'or ne m'en fui, mult criem que ne t'em perde."*

(vv. 56-60)

13) *Quant an la cambra furent tut sul remés,
 Danz Alexis la prist ad apeler ;
 La mortel vithe li prist mult a blasmer,*

De la celeste li mostret verité ;
Mais lui est tart quet il s'en seit turnét.

(vv. 61-65)

- 14) "Oz mei, pulcele ! Celui tien ad espus
Ki nus raens [t] de sun sanc preciūs
An ices [t] secle nen at parfit' amor ;
La vithe est fraisle, n'i ad durable honur ;
Cesta lethece revert a grant tristur "

(vv. 66-70)

- 15) Quant sa raisun li ad tute mustrethe,
Pois li cumandet les renges de s'espethe
Ed un anel ; a Deu l'ad comandethe.
Dunc en eissit de la cambre sum pedre ;
Ensur [e] nuit s'en fuit de la contrethe.

(vv. 71-75)

- 11) 彼，花嫁の待つ部屋に入りぬ。

- 12) 寝台を見るや，乙女を見つめたり。
その時，天なる主を思い出だす
何にもまして大切に思う御方なり。
して曰く「嗚呼，主よ，如何なる大罪我を打ち拉がん。
疾くここより出でずば我汝を失わん」

- 13) 部屋の中にただ二人のみになりし時
アレクシス殿 花嫁に語り始めぬ。
彼女に向いて浮世の生を戒め
天上の生の真実なるを説き明す。
然れど彼の心疾く立ち去らんと逸る許りなり。

- 14) 「聞き給え，乙女よ，汝夫とすべきは
貴き血もて我らを贖い給える御方なり。
この世に全き愛は無し。
生は儂く，末永き誉もあらず。
この喜びも大いなる悲しみと変る。」

- 15) 己がことわり悉く花嫁に示し終るや
彼女に剣の帯と
指環を託し，花嫁を主に委ねたり。
さて父の館を抜け出だし
真夜中かけて故国を去り行きぬ。

見られるように古伝語『聖アレクシス伝』の作者はラテン語 Vita に記されている内容を基本的には何1つ変えることなく、その記述を敷衍しながら極めて表現力に富む描写を成し遂げている。

この場面をめぐるラテン文をフランス文との比較は既に Auerbach が秀しく論じているので (Auerbach 1967, p. 126 以下) そちらを参照されたいが、事件の経過を互いにゆるやかに連関し合う幾つかの場景に分割して提出する技法、ここでくっきり浮き彫りにされている聖と俗との対比、⁽¹²⁾ 直接話法の効果的な使用 (ラテン文とは直接話法の箇所が異なる点に注意)、更にラテン文では「アレクシウスにとって誘惑など全くなかったかのように」 (ibid, p. 131)⁽¹³⁾ 一言も触れていない主人公の内面の葛藤を示す字句が挿入されていることなどに注目しておこう。

一方、イタリア語の作品で婚礼の夜の情景は次のように描かれている。

emtro em kammora se' nn' entrao
et po' l' ussu dereto si' mserrao
Solu sanctu A[lessiu] co la molge resta :
or la prese ad predicare et non dao resta.

(vv. 162-165)

Or la comenza ad predicare,
sapiamente ad favellare :
《 Donna, voliate pregare ;
una cosa te vollio mostrare,
se'tte lo plaquesse de fare,
estu meu comandu scultare.
Volliot' estu anellu dare,
estu balzu adcommandare,
estu sudariu ad te lassare :
pro Deu falume deservare.
Emfra me et te Deu ne sia mesu
emfratantu ket te sia erkesu 》

(vv. 166-177)

(アレッシオ) 寝室に入りて
戸口を後ろ手に閉じぬ。
聖アレッシオただ一人妻と残る。
さて妻を諭し始めて倦むことなし。

さて妻に諭し始めて
諄々と説き明かす。
「妻よ、我汝に願わん。
一つの事汝に示さん。
若し汝の心諾うならば
我が願いを聞き容れ給え。

この指環を汝に託し
この刀帯を汝に委ね
この布を汝に残すこと我が望みなり。
後生なれば我が為にこれを預り給え。
我と汝の間に主のいますことを
汝に求めらるる時続くまで。

イタリア語文はラテン語 Vita の記述を順にパラフレイズしているような具合である。フランス語文に見られた儚い浮世の生活と真実の天上の生活との対比などはなされていない。アレクシウスの説教の真意がどこにあるのかこの部分では明確に表現されていない。《汝、キリストをこそ夫にすべし》、フランス語文で花嫁に向けられたアレクシウスのこの要求 (vv. 67-68) を、だがイタリア語 Ritmo の作者は別の箇所でも表現しているのである。それは婚礼の描写の中途に現われる部分である。

Ma de quantu vede sanctu
A[lessiu] multu pocu attende :
altru cogitava ket homo non attende

(vv. 134-136)

Et mo que giva cogitando ?
De la molge remaritando
et como et quintu la renuntiando
et ad Christu la sponsando.

(vv. 137-140)

されど己が目にする事
アレクシオ上の空にて見過せり。
人の予期せぬ事思いめぐらせばなり。

さて何をば思いめぐらしたるにや。
妻を再び嫁がする事
如何にして己の妻たるを拒み
キリストを夫にせしむべきや、その事なり。

明らかにこれは婚礼の夜の説教を補完する部分である。語り手が《or la prese ad predicare ……》と切り出す時、既に聞き手はアレクシウスの意図するところを知っているのである。

アレクシウスの出奔の意味を一続きの場面に集結して表出化した古仏語の作者に対し、イタリア語 Ritmo の作者はいわばそれを、意識的にせよそうでないにせよ、拡散して表現したのであった。

ところで、過去の出来事を語る際にその叙述に生彩を与えるため動詞の過去のテンスに代えて現在形を用いる、いわゆる「歴史的現在」の技巧は広く様々な言語に見られる現象であろうが、古仏語に於て過去の叙述を行う一続きの文章の中で、現在形が単純過去や半過去と

交互に使われる現象が頻繁に見られることはよく指摘される通りである（例えば M'énard 1973, p. 138 参照）。

『聖アレクシス伝』の中でもこの用法は作品全体に亘って数多く見られる。上に挙げた婚礼の夜の場面でも *veit* (v. 56), *remembret* (v. 57), *ad* (v. 58), *mostret* (v. 64), *est* (v. 65), *cumandet* (v. 72) などの例が目につく。⁽¹⁴⁾ これは、直接話法の部分は別にして主文の動詞に専ら現在完了形と未完了過去形とを用いて記述を進めていくラテン語 *Vita* との大きな違いである。

今個々の用例について検討している余裕はないが、古仏語に於てかなり自由に許容されていた現在形と過去のテンスとの交替は『聖アレクシス伝』の作者にとって恰好の表現手段たり得た。前に語り手の介入という点について述べたが、その語り手に課された役割はアレクシウスの伝記を遠い異国の昔話として提出することではなく、「北フランスの聴衆の間にアレクシスの姿を目のあたりに現出せしめ」(Uitti 1967, p. 291), 文字通り生きた道德的典範を聞き手の胸に刻み込むことにあったからである。

イタリア語 *Ritmo* でもフランス語程頻繁にはないが同様の現在形の用法が見られる。例えば婚礼の夜の場面に於ける *resta* (v. 164), *dao* (v. 165), *comenza* (v. 166) など。語り手が主人公の心理に立ち入ってこれを聞き手に伝えようとするような箇所にはしばしばこの現在形が用いられているのが注目される。既に引用した例の中では *ka non le vai per core amore* (v. 97), *ammcrdora li cori de sotta li non capu* (v. 128)。⁽¹⁵⁾

最後にフランス語イタリア語両詩に共通して見られる、中世の詩法で重要視されていた敷衍の技法 (*amplificatio*) に触れておきたい。*Amplificatio* は中世の詩論書で更に幾つかの技法に細分されていたが (Faral 1924, p. 62), 解釈法 (*interpretatio*) 及び装飾法 (*expolitio*) と呼ばれる技巧があり、これらは簡単に言うなら「同じ事柄を言葉をかえて表現する」(ibid, p. 63) ことであった。古仏語『聖アレクシス伝』に見られるこの技法に就ては Curtius 1936, pp. 125-126 に指摘されているが、一例を挙げるなら冒頭第一行の

Bons fut li secles al tens ancienur (v. 1)

古え人の時代こそよき世なりけれ

が次の節で

Al tens Noë ed al tens Abraham

Ed al David, qui Deus par amat tant,

Bons fut li secles ; (vv. 6-8)

ノアの時代、またアブラハムの時代

はたまた神の愛で給いしダヴィデの時代

よき世なりけり。

のように敷衍されている箇所がそれである。

イタリア語の *Ritmo* でも父親がアレクシウスに妻をとらせようと決意する件で

et altru consiliu ce trova citiu :

lu vasu dell' auru britiu

no lo vollze lassare [n] sacrificitiu.

(vv. 93-95)

して別なる考え（父親の胸に）早浮かぶ
純金の器
飾り物に打ち捨て置くを望まざりき。

が前に引用した

et ad quillu gillu, novo flore
pemsarali dare lu patre honore
d'estu mundu traditore :
feceli fermare uxore
ket de genera era 'mperatore. (vv. 100-104)
.....

婚約者を定めつ
それ皇帝の血をひく御方なり。

の最初の3行に敷衍された後、それを含む全5行は

Ma poe ket tantu non potte stare
ku lu voleva puro exorare,
femina li fece fermare
ket em tutta Roma non avea pare.
(vv. 107-110)

而してもはや待つのももどかしく
是非にも妻を取らせんと思いて
婚約者を定めつ
それ全ロオマに比類なき御方なり。

と言葉を変えて表現されている。同様の技巧は Ritmo 全体で頻繁に用いられている。

フランス語 *La Vie de Saint Alexis* に見られる修辞技法を具に検討した Curtius は、この「均合がとれ意識的かつ節度ある芸術作品」(Curtius 1936, p. 135)の作者が「(中世)ラテン詩法の理論及び運用に精通していた」(ibid)という結論に達した。

イタリア語 *Ritmo su Sant' Alessio* の方はと言えば、詩形の違いもあって均衡のとれた簡潔さには欠けるものの、ラテン語源泉に肉付けを行う上で古仏語作品と共通する技法が幾つか見られる点を確認して一先ず小論を終えることにしたい。

[註]

- (1) 11世紀(或いは12世紀初め)に恐らくノルマンディー地方で成立したものと推定されている。作者名は不詳である。詩行は125節に分れ、各々の節は同一の母音押韻による十音綴五行によって書かれている。本考での引用は写本L(12世紀前半)の読みに基づいた Storey 1968 の版に従い、Rohlf's 1968 その他の刊本をも参照した。
- (2) 1200年前後に書かれたとされマルケ地方を含む中東部イタリアの方言が反映されている。残された写本は1本のみ(13世紀前半)。作者名はこれも不詳である。全257行で扱われているのはアレクシウス伝の前半、即ち主人公が花嫁を捨ててシリアに赴き

苦行者の生活を始める件まででそれ以下の部分は欠落している。各詩節は韻の異なる2つの部分に分れ、主として八～九音綴からなる部分に十～十一音綴の部分が続く。各節の行数は一定していない。本文での引用は Contini 1960 に収録されたテキストに従い、Dionisotti-Grayson 1972 その他の諸版を参考した。

- (3) 東方に起源を持つこの伝記が西欧に伝えられるまでの経緯については Uitti 1967, p. 274 以下参照。
- (4) 英 Bollandists, 仏 Bollandistes, 伊 Bollandisti は、ベルギーのイエズス会士 Johann van Bolland (1596-1665) の事業を引き継ぎ、聖者伝の一大集成である Acta Sanctorum の編纂に携わる同会の聖職者に対する呼称。聖人暦に従って編集の行われているこの大規模な出版物は今日なお 12 月分の刊行が続けられている。ここで採り上げる聖アレクシウスの伝記はその第 29 巻 (= Jul. IV, 1725 年アントワープ刊) の pp. 251-3 に収められているが、本考での引用は Rohlf s 1968 に再録されたテキストによる。
- (5) 例えば 13 世紀のジェノヴァの司教 Iacobus a Voragine の手に成り大好評を博した聖者伝集いわゆる『黄金伝説』 Legenda Aurea に収められた聖アレクシウス伝はボランディストの Vita を要領よく縮めたような恰好になっているし、彼とほぼ同時代に生きたミラノの Bonvesin da la Riva のイタリア語韻文によるアレクシウス伝も Vita の行文を逐一パラフレイズしているような作品である。なお聖アレクシウスの伝記は宣教師たちによって我が国にももたらされ 1591 年加津佐で出版された『サントスの御作業』中、「サントアレシヨ コンヘソウルの御作業」としてまとめられた。この「サントアレシヨ」はボランディストの Vita から直接作られたものではないが両者の間の類似は著しい。
- (6) Uitti 1967, p. 284 参照。
- (7) 事実ボランディストの Vita とは別に古伝語の『聖アレクシウス伝』の直接の原典となったラテン語作品を探し出そうとする研究もなされている (cf. Uitti 1967, p. 264 n. 3, Id. 1970, p. 130 以下)。イタリア語の Ritmo に関してもこれの直接の原典になったのがボランディストの Vita に類似しているにせよそれとは別のラテン語作品だったろうと Ritmo のテキストを最初に公刊した Monaci が既に指摘している (Monaci 1907, p. 109)。
- (8) ボランディストの Vita 及び古伝語『聖アレクシウス伝』の成立時期を含む 10 世紀から 12 世紀にかけては西欧に於てクリュニー修道院の改革運動や教会の肅正運動が推進された時代であり、アレクシウス伝に見られる禁欲主義・瞑想主義は時代の精神に合致するものであった。
- (9) 当時専らキリストや聖者の事績を語り聞かせる、聖職者とのつながりの深い吟遊楽人がいた事が知られるが (Cianciòlo 1938, p. 178, Faral 1964², p. 53), これもそうした楽人によって歌われたものであったろうか。なお、フランス語の『聖アレクシウス伝』が jongleur によって吟じられ世俗化していく過程は、Paris - Pannier 1872 [1974] に収められた 11 世紀の古伝語伝記に粉飾を施した 12 世紀の作品からも既に窺うことができる。
- (10) イタリア語の Ritmo とほぼ同じ頃に書かれた八音綴による古伝語の La Vie de Saint Alexi にもその婚礼の描写中 Mes en son cuer out grand tempeste. /

Et par dehors esteit la feste (vv. 123-124, Paris 1879, p. 171) なる対句表現が見える。

- (11) 婚礼の宴に楽士を登場させたりして描写に色どりを添える手法は他の Alexius 伝にも見られる。註(10)に挙げた八音綴の伝記にも *Mout i out divers estrumenz, / Gignes et harpes et vieles* (vv. 128-129) のような表現があるし、16世紀スペインの聊か伝奇物語的な色合の濃い *La Vida de Sant Alexo* には *tantos juglares, y con trompetas y añafiles y cornamusas y organos y atabales y baldosas y salterios y cimphonias y cañones y otros instrumentos de muy estrañas maneras* (Rösler 1949, p. 336) と何とも目ざましい列挙がなされている。
- (12) 加津佐版『サントアレシヨ伝』でも同様の修辞技巧を使って聖俗の対比がなされている。「その上はかなき浮世の無常を観ずれば、ただ目の前にあらはれて、万事は皆一炊の夢のごとくにうつりかはって、あとはかもなく去り失する。人の命の間に消えやすきことは草の露、水の泡に異ならざる生涯にてありながら、何ぞ真実のいさぎよくして、終らざる命の上にはかりなきよるこびを求めまじきや」(福島 1979, p. 201)。
- (13) アレクシウスに対する誘惑の魔手は後に現われるロマネスクな伝記に於て、主人公の遁世を妨げようと企む悪魔となって登場する。例えば15世紀イタリアの *Istoria Sancti Allexi* (Altrocchi 1925) や先に挙げた16世紀スペインの *La Vida de Sant Alexo* (Rösler 1949) など。
- (14) 但し「歴史的現在」の現われる箇所は写本によってかなりばらつきがある(cf. Uitti 1967, p. 289)。今 Foerster-Koschwitz 1884 によって調べると v. 56 の *veit* (写本L) に対して写本 A, P では *vit*, v. 62 では *prent* (A) に対して *prist* (L, P), v. 74 では *ist* (A, P) に対して *eissit* (L) というような現在形と単純過去形との異同, v. 65 では *est* (L) に対して *iert* (A), *esteit* (P) というように現在形と半過去形との異同が見られる。
- (15) cf. フランス語 *Dunc li remembret de sun seinor celeste* (v. 57), *Mais lui est tart quet il s'en seit turnét* (v. 65)

引用文献

- Altrocchi, R., 'A new version of the legend of Saint Alexius', in *Modern Philology* 22, 1925, pp. 337-352.
- Auerbach, E., 『ミメーシス』(上) (篠田・川村 訳), 東京 1967.
- Cianciolo, U., 'Contributo allo studio dei Cantari di argomento sacro', in *Archivum Romanicum* 22, 1938, pp. 163-241.
- Contini, G., *Poeti del Duecento*, I, Milano-Napoli, 1960.
- Curtius, R. E., 'Zur Interpretation des Alexiusliedes', in *Zeit. f. rom. Phil.* 56, 1936, pp. 113-137.
- Dionisotti, C. - Grayson, C., *Early Italian Texts*, Oxford, 1972.
- Faral, E., *Les Arts Poétiques du XII^e et du XIII^e siècle*, Paris, 1924.
- Id., *Les Jongleurs en France au moyen âge*, Paris, 1964.

- Foerster, W. — Koschwitz, E., *Altfranzösisches Übungsbuch*, Heilbronn, 1884.
- 福島 邦道, 『サントスの御作業 翻字・研究篇』 東京, 1979.
- Ménard, Ph., *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, 1973.
- Monaci, E., 'Antichissimo ritmo volgare sulla leggenda di Sant'Alessio' in *Rendiconti della R. Accademia dei Lincei, Classe di sc. morali, storiche e filologiche*, ser. 5 vol. 16, 1907, pp. 103—132.
- Paris, G. — Pannier, L., *La Vie de Saint Alexis, textes des XI^e, XII^e, XIII^e, et XV^e siècles*, Paris, 1872 [= Genève, 1974].
- Paris, G., 'La Vie de Saint Alexi en vers octosyllabiques', in *Romania* 8, 1879, pp. 163—180.
- Rösler, M., 'Versiones españolas de la leyenda de San Alejo', in *Nueva Revista de Filología Hispánica* 3, 1949, pp. 329—352.
- Rohlf, G., *Sankt Alexius, Altfranzösische Legendendichtung des 11. Jahrhunderts*, Tübingen, 1968.
- Storey, C., *La Vie de Saint Alexis, Texte du Manuscrit de Hildesheim (L)*, Genève—Paris, 1968.
- Uitti, K. D., 'The Old French Vie de Saint Alexis, Paradigm, Legend, Meaning', in *Romance Philology*, 20, 1967, pp. 263—295.
- Id., 'Recent Alexis Studies from Germany', in *Romance Philology* 24, 1970, pp. 128—137.